

UDで学校生活改善

佐賀市・北川副小

授業方法や食物アレルギー

児童の特性調べ対応



色違いの給食トレー(手前左)。アレルギー対応の児童と一目で判断できるようにピンク色にしている=佐賀市の北川副小

握することから始めた。岡山県総合教育センターが開発した評価テストを毎年4月に実施し、「書き写す力」「場の状況を理解する力」「耳で聞いた情報の記憶力」など、8項目を調べる。どのような作業が苦手なのか、特性を知った上で具体的な手だてを考える。

誰にとっても利用しやすい「ユニバーサルデザイン(UD)」の視点を小学校に取り入れている佐賀市の北川副小(松田美恵校長)が、2年間取り組んできた実践内容を冊子にまとめた。短時間に記憶することが苦手だったり、文字を書くことに時間がかかるなど、児童たちのさまざまな「特性」に対応しようとする。すべての児童が、戸惑いや困惑を感じずに学べる学校とは。モデルがないなか、現場教師たちは模索を続けている。

同校は、児童の特性を把握することから始めた。岡山県総合教育センターが開発した評価テストを毎年4月に実施し、「書き写す力」「場の状況を理解する力」「耳で聞いた情報の記憶力」など、8項目を調べる。どのような作業が苦手なのか、特性を知った上で具体的な手だてを考える。

どのような特性の児童が多いかによって、授業の進め方や工夫するポイントを変え。担任は、「声だけでなく、板書でも情報を伝える」「抽象的な言葉を極力なくす」「目当ては簡潔に示す」など、必要な工夫を「UDシート」として明確に意識して授業を進める。

掃除や給食など、学校生活全般もよりよい方法を探っている。教室の掲示物はすべて後方に移し、色分け

して視覚情報を整理した。掃除の仕方も担任によって指導法が変わらないよう、ぞうきんがけの仕方など学校で方法を統一している。給食では、アレルギー対応の児童には色違いのトレーを使う。色分けにより、他の児童も知ること、給食の点が大切になっている」と話す。冊子は県内の全小学校に配布する。(山口貴由)

この誤食の危険を減らす。北川副小は06年度、発達障害児童を普通教室に適応させるための「通級指導教室」を県内で初めて開設した。以来、全児童が困惑しない学校づくりを研究している。13年度から市教委の研究委嘱を受け、14年度から研究指定校。児童個人への支援充実と、UDの意識を根付かせることを研究課題としている。

先行事例なく模索 冊子化も



北川副小の学校生活ユニバーサルデザイン化の実践をまとめた冊子

この誤食の危険を減らす。北川副小は06年度、発達障害児童を普通教室に適応させるための「通級指導教室」を県内で初めて開設した。以来、全児童が困惑しない学校づくりを研究している。13年度から市教委の研究委嘱を受け、14年度から研究指定校。児童個人への支援充実と、UDの意識を根付かせることを研究課題としている。

具教委によると、全児童のうち、発達障害の傾向を持つ児童の割合は3・81%(12年度)。研究主任の近藤慎也教諭(46)は「発達障害の有無にかかわらず、すべての児童を学びのステージに乗せたい。授業や学校生活全般でデザインする視点が大切になっている」と話す。冊子は県内の全小学校に配布する。(山口貴由)